

福井 皆さんこんにちは。本日、昨年の愛媛大会に続きまして、この愛知県でのパネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます福井と申します。よろしくお願いいたします。

昨年は、東日本大震災であるとか原発事故、台風の被害とか、本当に故郷(ふるさと)を失ってしまったとか、故郷を失ってしまうのではないかと、大きな問題が続きました。そこで、この過疎問題についても、そういった、この日本の美しい故郷を失ってしまう一つの原因になるのではないかとということから、ディスカッションを進めさせていただきました。

本日は、昔から皆さん、よくご存知の言葉。まちづくりには「よそ者、バカ者、若者」、これが大切だと言われていますけれど、私は、各地でまちづくりをお手伝いさせていただいておりますけれども、私が「これ凄くないですか。」と言いますとね、意外と、町の方が「そんなもん、どこでもあるものでしょ。」とおっしゃったり。逆に、商品開発なんかのお手伝いをしていますと、「うちのこの商品はね、材料はね、すごく美味しくて、農家の方が一生懸命作ったんですよ。」と。申し訳ないけれど、そんなの当たり前でね、そこからがスタート。その後、続くストーリー作りをしなければいけないのではないですか、と突っ込みを入れてしまうことがよくあるのですね。この辺、今日、基調講演をいただきました飯盛先生の資源化プロセス。この辺でもお話いただいたことだと思います。

本日のテーマ「過疎地域でともに歩む～外からのサポートと内なる価値～」ということで、各地で、地元の方が意外と気づいていない、地域の財産を外からの目線で気づかせてくれて、しかも、一緒に頑張っていたいでいる方もおいでいただいています。本日、短い時間でございますけれども、パネリストの皆さんに、それぞれの経験に基づく地域の活性化について語っていただきたいと思います。本日のパネリストの皆様、簡単ではございますけれども、ご紹介させていただきます。

こちら側から、先程基調講演をいただきました慶應義塾大学准教授であります飯盛先生。同じく先程、特別講演をいただきましたstudio-L代表で京都造形芸術大学教授の山崎亮先生。続きまして地元・新城市長でいらっしゃる穂積亮次様。秋田県企画振興部地域活力創造課活力ある農村集落づくり支援室長であります小野一彦様。そして、素材香房味蔵「耕すシェフ(地域おこし協力隊)」の安達智子様です。それぞれのパネ



リストの方の略歴につきましては、お手元の資料がございますので、そちらをご覧くださいと思います。

早速お話を進めていきたいと思います。全国で過疎地域の抱えている問題は、共通点も多いので、いちいちそれを挙げていてもしょうがない、キリがないところがございますけれども、手短かに自分たちの置かれている現状、自分たちの現在の取組等をまず語っていただきたいなと思います。

では、最初に、開催地でございます、ここ新城市のご紹介も兼ねまして、穂積市長様よろしくお願いいたします。

穂積 ご紹介いただきました開催地の地元新城市の市長の穂積亮次と申します。まずは、全国から、この過疎問題シンポジウムにお集まりいただいた皆様に、心から感謝を申し上げますとともに、市民をあげて歓迎を申し上げたいと思います。また、全国過疎問題シンポジウム、すでに何回も回を重ねておりますが、今回、愛知県が初めて開催をするということになりました、私どもの新城市北設楽地域、さらに豊田の地域が会場となりました。明日は分科会で、たくさんの地域を見ていただくことになるとは思いますが、今日は開催地ということで私の方から紹介などをさせていただきます。

冒頭、大村知事が、愛知県の製造業出荷額等々お話になった後、愛知にも過疎があるのかというお話をされました。私ども過疎地域の市町村長は、集まる機会が多いわけですが、やはり同じように、どこに行っても、愛知県という恵まれていますね、トヨタ自動車もありますね、という話になるのですが、愛知にも過疎があるのかということをよく聞かれます。

先程、山崎先生に人口の減少・増加等の地図を見せ



ていただきました。愛知県は2年前の国勢調査でも人口純増でありますけれども、実は2回前の平成17年の国勢調査で、私ども新城地域が愛知県で初めて純減地域となりました。愛知県にも赤があるということ、そういう意味では、先進地ということになります。国勢調査があったのが平成17年でございます。その年の10月1日に、旧の新城市、鳳来町、作手村という1市1町1村が合併をして、現在の新城市になっております。新設合併でありますので、対等でありますけれども、市の名前は旧の新城市、中心地でありました新城市をそのまま踏襲しております。

地図でご覧のとおり、愛知県で静岡県境に位置して、豊川流域の中間地点でございます。面積が約500平方キロメートル、隣の豊田市が愛知県では一番大きくて、約1,000平方キロメートルありますけれども、その次に、愛知県では面積の広い町であります。人口約5万人の人口規模は小さな、財政力も小さな町でございます。合併した時点で過疎地域の指定を受けていたのが旧鳳来町と作手村でございます。合併をいたしまして、その当時の規定で、合併した新城市の地域全体がいわゆる「みなし過疎」といわれまして、過疎債等の発行も地域全体で行うこともできました。その後、過疎法の更新がございまして、現在では新城市内の中の、旧新城市、約120平方キロメートルであります。それを除く旧鳳来町、作手村地域が過疎地域の指定を受けておりました、様々な過疎対策を行っているところです。

地域の資源には、いろいろなものがあるよというお話がありました。私どもは、やはり何といっても地域の自慢は歴史文化であると思います。長篠・設楽原の戦い、天下分け目の戦いでもありますけれども、その決戦場の場所でもありますし、遠くは、平城京よりも古く開利をした鳳来寺山、名刹であります。全山、国の名勝に

なっています。鳳来寺山が開利され、以来、戦国時代は、東西あるいは甲州等々のいろんな群雄割拠のなかで、様々な駆け引きが行われた地域であります。

その後、江戸時代に入りまして、この地域は山の産物と海の産物等を取引する集散の集積地になりました。そこで私ども、新城市の総合計画は「市民（ひと）がつなぐ 山の湊 創造都市」と謳っています。人が、というのは「市民」と書いて「ひと」、がつなぐと読みますが、山の湊というのは、湊はサンズイの港湾の港ではなくて、新湊市（しんみなとし）がありますけれども、湊（そう）ですね、「山の湊 創造都市」と書きます。山の湊というのは、江戸時代の、この新城市の町の賑わいを表したものでして、山の中に港が出現した、豊川の舟の舟運と、それから伊那街道等の馬車の陸運とが、ここでちょうど結節をいたしまして、信州、あるいは東濃、東美濃ですね、東濃地域へと行き、あるいは海へ、豊橋等へ行く。そういう中間地点でありました。そうしたところから、先程も山崎さんがお話になりましたが、総合計画を作る時に、最後一体どういうタイトルにするか、というのが悩みに悩むわけです。「人が織り成す何」とか、たくさんあるのですが、故きを温ねて、山の湊と言われていた賑わいを、また、そういう山の中に突如として湊のようなものが出現したという驚きのようなことも含めて、この新城、北設楽地域を作っていきたいという思いから、「山の湊 創造都市」といたしました。

そして、平成26年度、あと2年半後には新東名高速道路が、この地域に開通をいたします。昨年3・11以来、内陸部での様々な産業活動の動きが活発化しています。

明日ご覧いただく北設楽郡の3町村と私ども新城市は、平成の合併の時にも、全部で合併をしようかという話がありながら、なかなか、いろんな諸般の事情で、今、それぞれ、別々の市町村を営んでいます。基本的には一帯の運命共同体としてやっていく決意で、今、北設楽郡の3町村と新城市との間に様々な連携、広域連携の形を作っております。昨年は、愛知県では何番目かになります「観光交流サミット」と称しまして、奥三河を観光交流で売っていこうということもやっておりますし、愛知県の知事がお話になりました「あいち森と緑づくり税」、いわゆる森林環境税であります。そこでの山林振興、森づくりも4市町村共同の条例を作って、一緒の形で取り組んでいこうとしているところでもあります。

また、新東名の開通をにらんで、北設楽郡山間地からも就業ができるように、先程、居住拠点都市ですか、お話がございましたけれども、そのような地域の一体化を目指して、進んでいきたいと思っています。

自然歴史文物には優れたところがございます。もちろん過疎地域が抱える共通の課題を抱えておりますけれども、新しい価値観をこの地から発信していく決意で取り組んでいるところがございます。以上、自己紹介といえますか、北設楽郡の紹介に代えさせていただきます。

福井 はい、ありがとうございます。ソフトの部分、歴史というのはやっぱり町の発信にとって大変な戦力になります。ここは長篠の戦いとか、立派な文化的歴史をお持ちですので、大変興味深いところです。

続きまして、同じく行政の立場から、秋田県において全国唯一の過疎集落専任組織である「活力ある農村集落づくり支援室」。この小野室長の方から現在の取組などお話ししたいと思います。

小野 皆さんこんにちは、山崎先生の地図で真っ赤に燃えた人口減少先進地、秋田からまいりました。だいたい秋田空港と一時間半弱でこの愛知とはつながっておりますので、そういう近い秋田ということで、ぜひ見ていただければと思います。

私ども、3年前に推進チームということで、市町村とつながって6人プラス全市町村職員ということで、取組を進めてきましたけれども、そうした取組につきましては、創設当時、NPO法人ひろしまねの安藤さんから非常に、いろんなご指導を受けました。幾度となく来ていただいて、本当にありがとうございます。この場を借りて御礼を申し上げたいと思います。その3年後の、今の「秋田の元気ムラ」ということで、皆さんにご報告したいと思います。

お手元のチラシに「あきた元気ムラ」ということで、集落を応援するホームページのチラシを皆様のところにお入れしていますけれども、これは、北から南まで47地区、集落でいいますと201集落が、自分たちの資源を外部の皆様と力を合わせてですね、生かして、将来を決めていく、自立をしていくと、そういうことの情報発信、あるいはお宝発見活動、そういうことをやっている集落をホームページで情報発信してございますので、本日の午後3時に、私のお話する内容の詳しい部分をサイトにアップしますので、後程活用していただければと思

います。

それでは、私どもはどのようなことをしてきたかということの説明いたします。活力ある農村集落づくり支援室ということで、「元気ムラ支援室」という略称で呼んでいます。高齢化と集落の自立、イコール秋田全体の過疎地域の自立と活性化ということを目指しております。我々が取り組みましたのは、県と市町村が共同して、あえて共同という文字を使っていますけれども、全県の集落点検を7ヶ月かけてやりました。その特徴は、まずは行政の私どもが、県の職員と市町村の職員が、大学の学生さんの力を借りながらですね、一軒、一軒、集落の各家庭を訪問させていただいて、日ごろ考えていらっしゃる、あるいは地域への熱い思い、あるいは課題、問題、集落の好きなこと、あるいは将来予想など、様々なことを教えていただきました。これは、悉皆調査としてやらせていただきましたけれども、その後、この結果をもとに報告会、あるいは全住民が参加する元気ムラ座談会ということにつなげて将来像づくりを進めてまいりましたので、集落点検という言い方をさせていただいております。

その結果、52集落、1,000戸でしたけれども、私どもが、最初、高齢化等集落に対していただいていたイメージとは異なる、驚くべく全体像、潜在力を教えていただきました。まず、農村部ですので9割が、近所づきあいがあります。そして8割の方々が、ここが住み良いのだと。そして、7割の方々が地域を元気にする活動にとっても興味があると。そして、外とのつながりに対しては7割の方が歓迎していると。一方では、ほとんどの世帯で、このまま何もせずにいると将来集落が消滅してしまうのではないかというような強い危機感を感じてらっしゃいました。

そして、廻った集落には、様々な、多様な潜在力を



発見しました。ここは、にかほ市冬師（とうし）集落というところで、鳥海山の鳥海高原にある集落ですけれども、集落訪問、点検でお伺いしたところ、「なに県庁？市役所？あんたがたに付き合っている暇はない。」と最初お断りされましたけれども。何をなさっているかという、70歳代から90歳代のおばあちゃんたちが、神業のような素晴らしい技で、蓑とか草履とか作って、四国八十八ヶ所の霊場めぐりですとか、そういう方面に販売をされていらっしゃいました。民芸品というよりも実用品としてのマーケットが存在するということをお教えいただきました。これが後程、「あきた元気ムラじっちゃん・ばっちゃんビジネス」ということにつながっていきます。

10世帯で湯沢市皆瀬の若畑集落で、観光客向けの直販活動、東京に「みそタンポ」4,000本販売し、かつ出身者で、東京で頑張っているその息子さん達も一緒に、こういう活動に参加して。この調査の結果ですと、将来は退職したら帰ると、そういう存続モデルとして、がんばっている集落でございます。やはり、この集落点検を実施して一番良かったことは、私どもも外部の人間でありますけど、自治体の職員ですので、県庁の建物の中にも、外部の方々とどういう力をあわせて集落を応援したらいいのかわからないわけですよ。県と市町村の職員が、他の方にいきなり任せず、直接集落の方々と対話したこと。これが一番良かったのではないかなと私どもとしては思っております。

先程、二人の先生からお話いただきましたように、やはり住民の個々の方々の気持ち、あるいは、心に潜在するいろんな愛着、そういうものが一つの場で相互作用を發揮して、まとまれば、将来を決めていく自治組織としての力も高めていくことができるのではないかという仮説を立てて、そういう場づくりをやりました。

その場所には、ファシリテート役のNPOさんですとか、あるいは学生さん、企業、それから一軒の家からお母さんにも、おばあちゃんにも、皆さんに参加していただきました。これがその模様でございます。あとは、レーダー分析ということで、集落点検のデータを基に集落のつながり力、主体性、他者受容性等もその座談会に活用させていただいております。あと、人材育成ということでやらせていただきました。そういう仮説による政策を立てた結果、47地区、結果として様々な個と個がまとまって、目的に向かって力を發揮するような取組が生まれました。

これは、秋田県で高齢化率の高い五城目町で、最も

高齢化率が高い集落で、人材が宝だという結果が出たところで、人材マップを作ってみたのですが、おじさんたちが非常に芸の力があるということで、ドジョウ掬いですとか、秋田万歳ですとか、いろんなことができるということで、座談会の結果、ここでは集落で「漫芸一座」が結成されまして、他市町村の高齢化集落を廻って笑いを巻き起こしております。一方で、集落活性化のプロセスというのは、一年掛かったり、二年掛かったり、三年掛かったりしますので、行政の会計年度とは別に、やっぱり捉えなければいけないのかな、というふうに思いました。

こういうことで、そうですね、住民の方々の心の動きがなければ、一人一人の気持ちが集まって、組織として何か動くですとか、個を生かす舞台づくりにはつながりませんので、先程、飯盛先生から相互作用という言葉がありましたけれど、外部の方々と住民、住民同士、他の集落との交流、相互作用というのは大きな力を發揮するというので政策を進めております。以上でございます。

福井 はい、ありがとうございます。私、先程ね、座席のほうで小野室長から、集落点検、52集落でしたっけ？これを見せていただいて、それからもって政策立案をしたという、エクセルのようになった表を見せていただきました。あれもウェブサイトで見られるのですか？

小野 インデックスにはまだなってないのですが、これが神楽ですとか、伝統野菜ですとか、城址ですとか、カテゴリー化されていて、これを全部、取材陣が3年かけて住民の方から教えていただきました。それを、ネットで875のコンテンツでございますけれども、全県が「元気ムラ」ということで、テーマに応じて情報発信しています。北から南の神楽集落ですとかね、そんな形で今、情報発信しています。

福井 私もちょっと見させていただいて、びっくりしました。すばらしいデータだなということで。今日、行政関係の方、多いと思いますけど、このアイデアをお持ち帰りになってね、まず、自分の住んでいるエリアの財産。文化であるとか、芸能であるとか、食べ物とか、全部調べて、ああいうふうにしてもらいますので、これ、大変良いアイデアだなと思って、ぜひ

参考になさったらいいなと思います。

今日のパネリストの皆さん、行政の方だったり、大学の方であったりということで、どちらかというと、ちょっと、その地域の現場と連携して活性化を目指すというスタンスの方が多い。舞台なんかでいいますと、たとえば行政の方が舞台監督であったり、インフラを整える大道具さん、小道具さんであったりという感じで、大学の先生は外部からの演出家であったり、脚本家であって、いろんなストーリー、刺激を与えてくださる方という、そういう感じなんだということを思っておりますけれども、本日、紅一点でもありますし、唯一、その舞台上で、いわば女優さんとして、現場で演じていらっしゃるということで、期待しているのですけれども、安達さんのほうから取組のお話をお願いいたします。

安達 はい、地域おこし協力隊で、鳥根県邑南町からやってきました安達智子です。鳥根県邑南町は約1万2千人弱の人口の町です。

個人的な目線から話したいと思います。皆さん、どちらが幸せだと思うのでしょうか。Aが23歳で年収400万、東京のネット広告代理店で働くキャリアウーマン。Bが25歳で年収180万、畑と調理場で野菜と向き合う農業女子。Aだと思う人、手を挙げてください。Bだと思う人、手を挙げてください。正解はBなのですけれども。なぜかという、私なのです。どちらも経験したからということで、なぜ幸せだと思っているかということについて、今の具体的な取組をちょっと話したいと思います。

「耕すシェフ」という言葉のとおり、研修で調理を学んでいたり、普段は厨房にいて仕込みから営業までやっております。

また、地元の農家さんに有機無農薬の農法で圃場を20アールほど、味蔵農園としてお借りして、レストランで使う野菜を育てております。ただ、自分たちで、レストランで使う野菜をすべて賄えるわけではないので、季節によって、さまざまな野菜は、地域の農家さんと連携しながら調達しているところです。

プラス、農業と調理を研修するという以外に、私は、もとはネット広告代理店で働いておりましたので、そこで得意とする情報発信を勝手にやらせていただいております。「耕すシェフの腹ペこブログ」というブログですとか、ネット放送局のユーストリームというのを田舎から発信しているのですけれども、そういうことが、その地域では、すごく珍しいということで、マスコミか



らの取材ですとか、講演依頼をいただくことがありました。

いろんな活動をすることで、これが、ユーストリームの様子ですね。

ほかにはイベントの企画などもやっております、これは農家さん、鳥根県の良いところというか、元は横浜だったのですけれども、横浜と何が一番違うかという、生産現場が徒歩、歩いたところに、畑がたくさんあるというのが一番の違いです。

東京は食料自給率が1%と言われていて、鳥根は63%らしいのですけれども、やっぱり1%って、他に頼り過ぎじゃないかな、と感じていて、都会で生活しているときに生産現場と消費者の距離をすごく感じていたので、これをどうにか、私は少し縮めるようなこととか、もっと生産現場、農家さんとか酪農家さんとかと、いろいろお話をして、実際に自分が食べているものが、どういうふうに作られているのか、ということ、実際、歩いて知りたいな、ということ、思っていたので、レストランに、普段は、引っ込み思案の農家さんを連れ出して、これはどんなふうにしたのですか、ということ、お客さんの前で話していただく。これは、アスパラを作ってくださった農家さんが、アスパラの目利きについて、お話してくださっているところです。

いろいろ活動することで「レストラン味蔵」があるのですけれども、年間1万7千人の来客があり、1万2千人弱の町なのですけれども、レストランでは20名のU・Iターン者の雇用が実現できております。

ということで、私がやりたいなと思っていた、食を通じて生産現場と消費者をつなぐという活動と、地域が若者にやって欲しいな、と思っていたことが、Win-Winの関係でうまく成り立っているのが、今、邑南町の「耕すシェフ」の研修制度ということです。



福井 はい、ありがとうございます。私もね、8月終わりに鳥根県の浜田の方から、車をちょっと借りまして、訪問させていただきました。こう言っちゃなんですけれど、カーナビがないと、迷ってしまいそうな、周り全部山で、自分がどっちに走っているか、わからない感じの所だったのですけれど。ずっと行きますとね、酒蔵を改造した、大変お洒落なレストランがあって、そこでイタリアンをいただいてきて、ちょっと緊張したりして。美味しかったのですけれども。本当に、沢山のお客さんもおみえになっていて、大変驚きました。

先程、お二人に講演いただいたのですが、このお二人の方から、現在の取組についてですと、話がダブってしまいますので、3人のお話を聞いてお感じになったことであるとか、なんかコメントしたいなということがありましたらお願いしたいと思いますけれども。飯盛先生のほうからお願いします。

飯盛 すばらしいお話、取組で、私もおうかがいをして元気になった次第です。

秋田県さんの取組というのは、やはり、本当に地元の方々のニーズ、どういうことをやってらっしゃるかを知ることが、政策に生きてくるということが、すごく重要です。高知県さんも、集落支援員という制度で、県庁の方が、いろんな市町村に派遣されて、そこで、いろんな地元のニーズを吸い上げることによって、地域活性化につながっています。秋田県さんの取組をうかがい、これから、どんどん全国に広まってほしいですし、それが資源をもう一回見つめ直して、磨き上げていくプロセスになるのではないかなと思います。新城市の穂積市長のお話の中にでも、何もないということではなくて、これから磨き上げていくものがたくさんあるので、これ

から、こういう場を利用して、いろんな方々が入り込んで交流することで何か磨き上げられればと思います。

安達さんのは、言うことなしのすばらしい活動で、ぜひ、こういう流れがもっと、もっと他に、全国各地に広まっていくと、地方から日本が元気になっていくのではないかなと思います。やはり、ポイントは、地方にもともとあったいろんな強いつながり、関係性。すなわち毎日のように会う、そしてコミュニケーションをとる、これが、やはり地域の強みだったと思うのですね。都会では、なかなか、形成されない。地域の人は、本当に強いつながりがあって、そのつながりというのは、信頼感につながっていきます。極端なことを言えば、例えば、鍵をかけなくても外出ができる、隣近所に声をかけてさえいけば、外出もできるくらいの強いつながりがあったと思うのですけれど、それをベースにすることが大切だと思います。

一方で、山崎さんもお話をされましたが、ただそれだけですと、なかなか、創発というか、新しいことが、次から次に起こることにはなりにくい。やはり、住民の方々の強い、人間的な信頼のおけるつながりに、何とかして新しいつながりを上手につくっていくのか、というところがポイントになっていくわけで、そういう意味では、安達さんのような活動が、住民の方々の強い関係性、地域に元々あったネットワークにうまく埋め込まれることによって、融合することによっておこったことかなと考えます。これは、3人の方々の可能性に共通することかなと思いました。以上です。

福井 はい、ありがとうございます。私も安達さんのお話をうかがって、20人の雇用を生むということは地方では大変なことです、すばらしい活動だと思ったのですけれど。

あの、私の方から、飯盛先生に、ちょっと一つだけ教えていただきたいことがあったのですけれども。先程の講演の中で、大学と地域との連携ということですが、もしかしたら、山崎さんがおっしゃっていた「自立支援」とかにつながるかもしれませんけれど、大学を卒業なさった、こういうことを一緒に勉強された方というのは、卒業された後、どうなっているのでしょうか。

飯盛 これは、本当に人様々で、地域活動、例えば修士の学生で、ある地方都市の研究をした学生が、その地方都市の行政に入った人もいます。また、たとえば

自分の出身の地域の企業に勤める学生もいますし、一般企業に勤める学生もいます。私たちとしては、地域のことをよく知っていくということに併せて、教育の目的として、自分で考えて行動する力を育もうということを考えています。

なので、もし、その地域が気に入ったとか、もしくは、自分の出身地でそういう活動をした、という学生がいたら、将来帰って何かをやるとか、ということにつながっていくのではないかなという気もしています。

福井 はい、ありがとうございます。続きまして山崎さん、同じように先程の3名様、お感じになったこととかありましたら、コメントを。

山崎 今の最後のお話で、学生さんがその後どうなったかというのが、実は僕もお聞きしたいと思っていたことで、なるほど、と思いました。卒業してすぐではなくても、何年か後に我慢できなくなって、そういう仕事をやるというヤツも出てきますね。早稲田大学の建築を出た人間がね、修士の時には、実は建築の設計ではなくて、まさに邑南ではなかったかな、鳥根県の邑南町あたりに入っていたと思うのですけれど。赤い、長〜いテーブルで、みんなでご飯を食べるみたいなことを、邑南だったか奥出雲だったか。そこで何年か、修士だったから2年くらい、そのプロジェクトをやっている、しかし、卒業、修了した後は、建築設計事務所、日建設計という組織事務所なのですけれども、大きなところに入って。大きな建物ばかり設計していたのですけれども、3年くらいで、内なる声を無視できなくなって飛び出して、今、うちの事務所に合流してきているのですけれど。何年か経ってから、そのようになるというのも充分にあると思いますので、飯盛ゼミを修了した後、何年後にどうなっていたかが、すごく興味がある点だなと思いますね。

新城市の穂積市長の話、地域に歴史を始めとした資産がたくさんあるということで、これをこれからきっちりと、合併後でもありますので位置付けて、価値付けていこうと思う時に、飯盛さんがおっしゃったような、外からの視点、あるいは他者ですね、よそ者をどのように一緒にコラボレーションしていくか、というのはすごく大切なことだろうと思います。

ご承知のとおり、地域はですね、良いことを言っていると、言うこととあまり関係なく、誰がそれを言っている



るか、ということの方が問題になってしまう場合が多いのです。何を言ったか、より誰が言ったか、がすごく問題でね、「あいつは、良いこと言っているのだけれど、あいつが言うから、俺は協力したくない。」というのが、基本的な地域の考え方です。だから、たとえば、「長篠の戦い、良いよね。それを売り出そうぜ。」という話になった時に、それは、「あの人の家が旅館だからやろ。」とかですね、「それで儲かるのはあの人たちの一部の仲間ばっかりやん。」みたいな話とか。地域の中から、そのことを言おうと思っても言い出せないことって、やっぱり結構あるのです。そう言われるであろうことを住民は、分かっていますから、自分からそれは言えないというようなことにもなっていて、なかなか地域の価値を自らの口から言うことができない、ということになっていることが多いのです。

よそ者は、大丈夫なのです。そこで、長篠が本当に良いと思ったから、長篠の戦を使ってこういうふうにはPRしていったらどうでしょう、と言ったよそ者のメリットになることはない、そこで住んだり、働いたりしているわけではないので、こういう地域の利益と関係ない人たちと、どういうふうに役割分担をしながら、しかし地域の人でないと勧められないものもありますので、ここをどういうふうに組織化していくか。広い意味でのガバナンスをどういうふうに組んでいくか、というのが、新城市でもこれからすごく大切になってくることだろうと思います。

小野さんからの話は、僕はすごいびっくりしましたね。県下すべてであれをやるというのは、集落点検というのは、それぞれの市町村ごとにやっているというのは、特に中国地方と東北ではかなり前からですね、それこそ10年ぐらい前からかなり盛んに取り組まれていましたけれども、県全体でそれをやったというのはすごいことだと

思いますし、その労力たるやかなりのものでしょうし。あるいはですね、県庁の職員と基礎自治体の職員がセットで入っていくといった時に、両方とも、実はあまりやりたくないと思っている職員もかなりたくさんいたろうと思います、それを成し遂げたということはすごいことだと思います。

もし、課題があるとすれば、やっぱり県庁、あるいは市町村の職員に異動があるということでしょうね。ヒアリングは単にデータを取ってくるということだけではなくて、ヒアリングに行った人と住民との間の友達になるという、この人間関係が構築されているのですね、すでに。

ところが、どうしても報告書にあがってくるのは、そこで仲良くなっていろんな話ができるようになった関係性ではなくて、何を聴いてきたかという、聴いてきた内容のデータだけが入ってきます。これを後任の人たちが引き継ぐと言っても、そうは引き継げないのですね。「あの人がやったから喋ったことなんや。」とかですね、東北だったら関西弁はないか。「あの人が言ったんだ。」ということだったり、「あの人が、あの時良いことを言ってくれたから、お返しのようにこう喋ったんだ。」とかいう、本当に微細なその背景にあるような関係性が、ものすごく今、構築されているはずなのですが。たぶん、今後は異動とかでこの関係性が少しずつ壊れてしまうだろうと。ここをどう考えるのかは、ちょっと僕も答えがないのですけれど、すごく重要な点。その間に、例えば、他者が入ってきていて、移動しない人がいたとしたら、これは一つの価値になると思うのですね。県、市の人は異動したけれども、その時に住民との間で一緒に接続させてくれた人、それは、NPOなのか、外部者なのかわからないけれども、この人はずっと地域と一緒に見ている、ということになれば、関係性の一部は担保されたまま、いろんなプロジェクトができますから。ここに、地域おこし協力隊等々の意義があるのだろうという気がいたします。

となれば、最後に発表していただいた、地域おこし協力隊で「耕すシェフ」をやっているという事例は、まさにすごく理想的な状態で、地域の人たちとの関係性を継続的に築くことができる外部者でありつつも、たぶん、行政と住民の人たちの間に入って継続的に地域の戦略をずっと見ていたり、練っていたり、ということが出来る立場ですから、あの事業がきっちりと持続可能な形になっていくということが、実は、存在に内在す

る価値なのです。それがなければ、外から入ってきたよそ者という価値だけであれば、言いたいことが言える、という半分の価値しかやっていないことになります。

その人が行政の人たちと違う点は、ずっとそこにいようと思えばいられる、ということですから、報告の中にあつたとおり、7割以上が定住したという地域おこし協力隊の実績を鑑みるとすれば、いかに、持続的に、そこに暮らしながら、ああいう仕事をしつつずっとそこにいられる状態を自分たちの中で作りだしていくか、ということが、これからの課題になってくるのではないかと思います。もうすでに、かなりうまく回っている点もありますけれど、これは飯盛先生がたぶんご専門だと思いますが、たまたま今うまくいっていることが、10年後もうまくいくという保証はないので、常々、うまくいっているように見える組織というのは、中で新しいことをどんどん生み出しているということがあります。だから、今ウケたことを足がかりにしつつ、まったく新しい事業を、ほとんど毎年のようにアイデアを出して、絞って、新しいことにトライして、10個やったうちの1個は進んだとか、あと9はだめだった、みたいなことを繰り返しやっていくことが結果的には継続的に関わるということを作り出すのではないかと思いますね。

いずれにしても、三者の方々共にすごく勇気づけられる、可能性をかなり感じられるような事例だったと思いますね。

福井 山崎さんの口調で地域を回っていらっしゃると、結構入り込めますよね。人気があるだろうと思いますけど。

山崎 放火魔と言われますね。人の心に火をつけては、また別のところに火をつけてと。

福井 おまけに人口が少ないから、顔が見えてしまうという地域の良いところも悪いところもご存知なのだな、と実感しますけれども。逆に、僕、ちょっと山崎さんに二つほど質問したいなと思うのですけれど、最初のお話のなかで、人口減の話なさいました。昔、江戸時代末期くらいに戻っていくのかなあ、というお話をなさいました。ところが、おそらく、数は一緒であっても、構成ですね。高齢者の方の比率、高いじゃないですか、その辺はどういうふうにご考えてらっしゃるのかなという質問です。

山崎 おっしゃるとおりですね。高齢者が多くて若い人たちが少ないという人口構成になります。だから逆にいえば、江戸期とどの辺が高齢者は違っているのかとか、江戸期と情報だったり、流通はどの辺が変わっているかということを考えれば、こういう言い方は変かもしれないけれど、わりと簡単にブレイクするネタを見付けることができるような気がします。

まず、高齢者は圧倒的に元気ですよ、江戸期に比べて。40歳くらいになったら、そろそろ引退しなさいといわれていた時代と、75歳が一番若手であるというようなことがいわれている時代と。現実には75歳は圧倒的にまだ元気ですね。そういう状態の時に、65歳の人たちと一緒に何をやるかといったら、たぶん江戸期の時の高齢者と呼ばれていた人たちとは全く違う価値を持ちうる人材が、地域にまだ、ごろごろいるという状態だと思いますから。これをどういうふうに20年かけてですね、若い人たちとの、あるいは帰ってくるとかIターンで入ってくる人たちを受け入れるという仕組みに、この後20年の間につなげていくか。これがすごく大切な点だと思います。

後は、情報だったり、流通も相当変わっていますし、先程、ユーストリームで配信するということはかなり大きな力になっているという話もありましたけれども、今できることを、かつてと同じ人口になるけれども、構成が変わった時に何ができるかなと比較してみると、かなり違うことがいっぱいあるので、そこから発想して、じゃあこれを組み合わせれば、たぶん今までやったことのないことになる。比較的、我々の事務所では、そういうブレインストーミングをよくやって、100案くらいアイデアを出していき、その中から選りすぐりのものを実際に実行していくということをよくやっていますね。

福井 なるほど、ありがとうございます。もう一つ、教えていただきたいのですよ。先程、海士町のお話のなかで、家賃が安いとか、いろんなものがかからない。せいぜい携帯やコンタクトの費用でしょ、というお話。そこは納得できたのですが、彼女、彼等がある程度歳をとっていきますと、例えば海士町にいるから、今は、お話しした携帯電話代が安いとかね、例えば、いろんな全国区の価格のものが安いとか。例えば、子供さんがもし大学に行きたいとかなった時、その辺のことは考えてらっしゃいますか。



山崎 そうですね、そこは確かに何かあると良いなと思っています。離島振興法が変わったのですが、その時の議論で、議員の方々とよくディスカッションしていた時に、そういう場所だからこそ、たとえば燃料代とか、どうしても高くなってしまって、いろんな価格が高いという状態になってしまうのですが、せめてそこが本土と適正に競争できる価格までは、たとえば離島振興法の中での、枠での補助を出していこうということ。現に、今回はそういう包括的な補助金のことを盛り込んでいますけれども、そういうことをやった方が良いよねという議論は結構、前からやっています。

それと別に現場レベルでみると、実は案外、貯金できているのですよ。それもあって。僕の教え子が、ゼミ生が一人、就職したくないなんて言って、こんな話ばかりしているから、海士町に行きたいと言い始めて、行ったのですよ、役場の臨時職員で。彼女は、確か月給14万なのですね。「月給14万でおまえ暮らしているのか。」ということ言ったら、「案外暮らしています。」というから、「でも将来のことを考えたらね、貯金とかもいるぜ。」と、「貯金全然なしで暮らしているっていうんじゃないだよ。」と言ったら、「貯金しています。」とか言うので、ちょっとこっちもカチンときてですね、「貯金していると言ったってさ、1万2万じゃ将来のためには。」って言ったら、彼女は14万円のうち10万円ずつ毎月貯金しているのですよ。相当へこみましたけどね、僕もね。現に生活できているのですよ。一ヶ月に4万円しか使っていないと。それを聞いた時に、生活のしかた次第だなと思ったのですよ。別に見た目、そんなぼろぼろで貧乏ってわけじゃないのですよ。普通に役場まで自転車で通ってという感じだけなのですから、でも暮らし方というのをやっぱり相当刷新していけば、十分に

貯金をしながら生きていくことができるなと思いましたね。

福井 なるほど。ありがとうございました。さて、5人の方に今の取組とかそれに対するコメントとかいただきました。今日は、皆さん、ありがとうございます。だいたい時間通りに進んでいますので、珍しいことなのですけれども。

後半の方は、ではこれからどういうことをやっていきたいのだとか、こういうアイデアを持っているのだ、というようなお話をね、ぜひ会場の皆様のご参考になるようなお話、切り口をお願いしたいなと思います。まず、穂積市長の方からお願いしたいと思います。

穂積 はい、たくさんの事例を含めて、私も今、話を聞きながら勇気づけられたり、そんなことがあるのだと改めて感じながら聴かせていただきました。

今日のテーマが「外からのサポートと内なる価値」ということで、私はこういうところにいまして、行政という立場にいますと、例えば、山崎さんがこれからの人口減少の推計を言われて、適正な人口規模というのがあるでしょうという、そこにまた戻っていくのだということと言われて、大きなトレンドとしてみると、まさにそのとおりであると思うのです。

一方で、戦後の高度成長の中で、せっせとインフラ整備をしてきて、日本は世界でも稀有な国だと思うのですが、どんな山の中へいっても、舗装道路がありません、立派な会館があります、上下水道が備わっている、ガス、水道に不便する地域は、一部はあるでしょうけれども、基本的にはない、という社会を作ってきたと思うのです。学校もしかりです。

そういう中で、人口が減少していく中で、その維持そのものが苦しくなってくることによって、基本的な生活基盤そのものが保証できないというような事態もでてくると思うのです。

秋田県の悉皆調査のなかで、みんながみんな非常に住みよい地域だと感じているとありました。私もこういうところの、いわゆる限界集落といわれるような地域にお住まいの人たちの話を聴くにつけ、気持ちはまったくそうだと思うのですが、同時に、将来はどうなるのかなという強い危機感もお持ちだということと裏腹であると思うのです。この地域が好きだし、暮らし続けたいし、娘や息子は一緒に住もうと言って誘うけれど、ここで終

わりたい、というのが多くの気持ちです。それは地域の誇りであり、人生観ですから、それについてとやかくいうものではないと思うのです。と同時に、いざという時にはどうしたらいいのか。あるいは災害がきて集落が孤立したらどうするのか。その時にいずれはなくなる地域だから放っておけということは、行政、政府の立場としては絶対に言えないことです。それを、では、ここを近未来的にどのように運営をしていくのかということに、おそらく全国の自治体行政の方々が頭を悩ませていることだと思うのです。

その中で、新しい価値感を外からの目で見えていて、そこに新しい揺るぎない価値観をつくっていくのがこれからの仕事だと思うのですけれども、それぞれの新しい、今日も山里ガールのみなさん、山里チャレンジのみなさんがおみえなのですから、新城市に住んでいただいた加藤さんという方がブログに書いておられるのですが、新城の作手という、本当に山の中ですけれども、最初、何に困ったかという、夕方帰ってきて後、何したらいいのか一番困ったというのと、それと裏腹なのですね。何が一番違うかという、「時間の流れ方が全然違います」というのが返ってきた言葉なのですね。

私どもの地域にも新規就農者が結構入ってきています。農水省も新規就農に大きな力を入れて、新規就農対策を始めています。その中で名古屋ですとか豊田から新規就農ということで、農業を目指してやってくる方がみえます。それから若手の農業者も随分と頑張っている方がみえるのです。中山間地域の特有の困難がたくさんありますけれども、頑張っておられる人たち等々に話を聞くと、なんで農業が楽しいのかという、結局、自分の時間を持てるということ強く言われるのです。でも、忙しい時はめちゃくちゃ忙しいですから、日の上がる前から夜の夜中まで働く季節が何か月間かある。そのあと、ちょっと暇な時間がきた時に、自分で時間を調整して、自由な時間をなんらかの活動に使うことができる。それは、もはや、いわゆる収入、金銭収入では換算できないような価値観がその中に作られているように思うのです。

都会はとかく時間の召使いになっていくわけですが、山間地、あるいはこういう地域は時間の主人公になれるということを若い人たちはよく言われます。それはもう、まぎれもなく新しい価値観が着実に育ってきていることで、それを本当に楽園のように過ごせるような

エリアを作っていけるようにしたいと思っています。

一方で、同時に、先程言いましたように、自治体としては財政運営、それから教育、また、特に社会保障、医療ですとか、教育分野、これらの最低限のものは保証していかなければなりませんし、とくに国民皆保険の時代になりますと、医療が崩壊した地域は、まず人はもう住めないというのが実態だと思います。そういう面のカバーをしていくためには、一方では既存の産業振興、あるいは企業誘致なども力をいれていかなければなりませんし、また観光振興ということもしっかりやっとなきゃいけない。その中でも着実に若い、新しい価値を田舎に期待をしてくる方たちを、どれだけサポートできるか。私どものような地域にとっては、一人でも定住者が増えるということは革命的なことなので、それをしっかりとやっていきたいなというふうに思っています。ちょっとまとまりませんが。

福井 はい、ありがとうございます。また質問等は後程ちょっとさせていただきたいと思っておりますけれども。

続きまして、小野室長、お願いいたします。

小野 私の方からは三つのことをちょっとお話ししたいと思います。

まず集落が限界化を抑止して、自分たちで将来を決めていく維持活性化に向けるステップ。これは三年間関わり続けた集落の事例をちょっと分析させていただいた結果をもとに作ってみましたので参考にさせていただければと、そこから話を始めたいと思います。

これは集落によって様々なのですが、第一段階で、集落価値の発見、そして今、農業によるまとまりとかということがなくなっているなかでの話で、そういう個と個がつながる力が必要だと、つながる力の強化。そして三段階目は、そうこうしているうちに、お互いが考えていること、思いが一致したりして、組織としての主体性を発揮、さっき火をつけると山崎先生がおっしゃいましたけれども、スイッチオンの状況になると。そうこうしているうちに、最初から集落の将来像なんていうのは、作文は書けるけれど、やはり創発の連続だと思えます。そんなきれいな将来像は書けないと思います。それはやはり4番目くらいですね、実際にやってみて、いろんな形の試行錯誤をやってみて、それが積み重ねとなって、将来像になっていくのではないかと。そして、その過程で、いろんな方々が参画していくと。退職した



方が参画するですとか、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、そういう形で大体5ステップで考えております。

そして、このステップについて、まず一つ私が申し上げたいのは、よく言われるのが集落の問題は市町村の、基礎自治体の問題だろうと、県がなんでそこまでやるのだと、県庁内部でもいろんな議論がありました。いろいろ補完性の原理とかありますけれども、やはりそれは県民のために必要であれば、県庁は自治体ですので、県がやるべきことだと現場で判断すればやるべきだと私は思っています。そうした中で、このステップ1と2、この部分に関しては市町村の職員の方も地元の住民である場合も多いので、個別市町村の職員の方だけだとなかなか住民の心にスイッチが入る、ですとか、こういう段階まで至るのは、難しい場合があります。そういう部分で県の職員も入って、そして学生さんも一緒にお連れして、そして、そういう形で1・2段階に力をあわせて入っていくと。この集落点検は私どもチームから支援室になりましたので、このノウハウに関しては個別市町村でいずれはやっていけるよというということで、今、ノウハウの移転を進めているところでございます。

そして、この真ん中へんに「元気ムラ大交流会」ですとか、「元気ムラじっちゃん・ばっちゃんビジネスパワーアップ」ですとか、広域ホームページを活用した情報発信とか、こういう部分があります。

まず「元気ムラ大交流会」は、これは県内の北から南からすべての市町村、集落が一堂に会して、以後、化学反応をおこして、次の第一歩に踏めるようなそういう場を作って、その場で、訪問希望カードを投票していただいて、あの集落にいきたいということが分かれば、市町村はバスを出す、そして県は県南と県北の市町村同士をコーディネートすると。広域集落支援員を県で

置いていますので、その集落支援員の方がコーディネーターする、そういう、集落が市町村の区域を越えてつながる仕組みも作っています。

それから、先程、職員が異動したら元の本阿弥ではないかというお話がありましたので、その部分、やはり私どもも一番重要なことだと思っています。そういう意味では集落同士で、市町村の区域を越えた集落同士がテーマに応じて、縦横無尽に連携できるということが、補助金とかなくても、連携の相手方を確保できるということで。これが9月9日、総務省の森室長さんにも来ていただきましたけれども、こういうかたちでやっても、まさに先程の赤い地図のように、真っ赤に熱気あふれる交流会で、これをもとに北の、南の集落で、双方向の交流ですとか、そういう形で今やっております。

そういう形で県と市町村の役割というものがあるけれども、永続的な役割分担ではないかもしれないのですが、やはり今を、価値を最大限にしていけないと、生かされるべき人も、生かされるべき資源も、そのまま生かされずに終わってしまう場合が我が秋田にはあるので、やっぱり県と市町村、協力隊のみなさん、集落支援員の皆さん、総力戦で私たちは将来を作っていかなければいけないということでやっております。

次に、「元気ムラじっちゃん・ぼっちゃんビジネス」について、一言だけご紹介させていただきます。先程、わら細工ってありましたが、秋田の農山村にはあって首都圏の大都市にはないもの。これは促成栽培ではできない天然の山菜とかきのこですね、これを直接、首都圏の企業、私どもセールスで回りまして、今、千葉の柏の京北スーパーというところと、それから八王子の「元気な食卓」というところに、うわばみそう、みず、という、非常にあくのない山菜、みずの出荷をやっているところですが、やはり集落によって得意技、得意な山菜の種類が違いますので、山わさびとかですね、あと、天然のわらびでも雪のおかげで非常にいいわらびが出ますので。そういうのをあく抜き処理したものを出すとか、そういうルートが今、できております。これは、みずのたたきを首都圏の京北スーパーさんに「あきた元気ムラ応援団」になっていただいて、山形のだしに負けない、「とろーりあかみず」ということで、これを集落、複数集落の連携ということで出荷して、付加価値をつけて今、販売しております。これが首都圏での販売状況ですが、やっぱり感じたのは東北出身の方、そしてまったく東北のことを知らない方でも、こんなおい

しい食材があるのだと、方言でおばあちゃんたちにレシピとか教えていただくとですね、すごく喜んで買っています。これはやはり、格差の中にかくれた本当の価値というものではないかなということで、GBビジネスというのをやっております。

最後ですけれども、先程のステップでありますけれども、やはり外部の方の視点、外部の方が関わると住民の方々同士でもエネルギーが発生して、何かに向かっていこうという気持ち生まれるということは、何度も体験しております。これはお互いを知る、そして己をふりかえる、そして発見する、そして何かをやりたいという希望が生まれてくると。さっき資源化プロセスという話もおっしゃいましたけれど、まさにそういう部分、私ども一緒に回っている国際教養大、県立大、それから秋田大学の先生方といろいろ話をするのですが、とくに地域社会学の相互作用という概念ですね。まさに外部の視点で住民同士、あるいは他の集落同士、企業と集落、いろんなかたちでこの5段階を駆け上がる、そういう相互作用というものが発生しているのです。

そして今日、自治体の方々がいらっしゃっていると思うので、よく過疎債のソフトで、運動会やる経費になんで過疎債を使うのだと。そういう議論がいろいろ出てくる場合があるのですが、その場合にこの5段階のステップを住民個々が心を動かして合意して、来年も再来年もそういう形で、運動会で、みんな、老若男女、性別かかわりなく集まるのだと。これはまさに5ステップの中の1・2の段階に寄与するのです。ですので、そういう相互作用論というのを住民自治、あるいは集落対策にきちんと意味付けを行えば、平凡なイベントのように見えても、それはきっちりと将来の安心安全な社会づくりに役に立ち、起債の対象になりうるのだと、そういうことが言えるのでは、と私は思っております。以上でございます。

福井 はい、ありがとうございます。小野室長。先程、柏のほうで、スーパーとかで売ってらっしゃるというパッケージを見せていただきましたけど、これの営業セールスはどなたがおやりになっているのですか？

小野 まず最初、県職員が行くと会ってくれますので、私と、去年は県で委託した民間会社の方と一緒に会しまして、以後は民間の方と集落をつなぐような形にしております。一部、うちの職員がバイヤーのようなこ

とをやっていますけれども。これは、これから仕組みとして継続、もっと進化していきたいと思っております。

福井 これはやっぱりあれですか？四国の葉っぱビジネスみたいな世界を目指してらっしゃるのでしょうかね？

小野 先程の5ステップの中でですね、実は住民同士のまとまり対策としても、実はビジネスは効果があるのですよね。自信を生みだしますし。あるおばあちゃんが言っていました。こしあぶらを「せたがやガーデニングフェア」で販売した時ですけども、こしあぶらがグラムいくらかすごく高い値段で売れるのですよね。そういう活動を今、やっていますが、ワクワクするという言葉が、複数の集落の高齢者の方からいっぱい出てきました。これはやっぱり、資源が金銭的価値にきちんと換算されて、持続的な取組につながっている証拠だと思いますので、まだまだ小さな取組なのですが、市町村を越えて、県が広域的なコーディネートをしながらか、北から南の山菜のリレー出荷みたいなものですか、そういうようなことをどんどんやっていきたいと思っております。

福井 はい、ありがとうございます。では続きまして、安達さん、今後の思いとか取組についてお願いいたします。

安達 はい、山崎さんが先程おっしゃられたように、うまくいっているように見えているところには本当に新しい事業をたくさんずっとやり続けている人がいるという事なのですけれど、本当に今「耕すシェフ」の研修制度で、レストランを拠点にしているのですけれども、毎日毎日新しい取組をどんどん始めたりしています。

そして、私が今後、やりたい、やってみたいと思っていることは三つあるのですけれども、こういうふうに関外から来た人に対して、それが実現できる土壌とか、外からの、外部のアイデアを受け入れて、「やってみなさい、やってみればいいじゃない」というふうに言ってくれる町役場の商工観光課の方とか、町長さんもそのアイデアにすごく柔軟とか、理解があって、なんでもすぐに止めるのではなく、「農家ライブ」という先



程紹介したイベントの時も、私がまず「これをやってみたいです。」と言ったら、「安達さんいいじゃんいいじゃん、やってみなさい。で、何やるの?」というような。まず先に、とりあえず認めて、ステージを与えてくれるというサポートがあるから、今、私はこのようにアイデアを出すことができます。

やってみたいこと三つなのですけれど。ひとつは今、邑南町は「A級グルメの町」として、町民が誇りをもって育てた農産物を、誇りをもってその場所でしか食べられない、ここでしかできない体験として定義付けて、いろんな人に味わってもらい、その現場で味わってもらいというものを、レストランを拠点にやっています。A級グルメという言葉がけっこう先走ることもあって、きらびやかな、高級食材というイメージにもつながっているのですけれど、実際は町民の人が誇りをもって、外に出せる食材というのをやっています。ただ今回はそういうイメージ先行のものではなくて、実際、生産現場がやっぱり近い場所だと感じています。たとえば、猪を、会場の中で飼ったこととか、現場を見たことがある人はいいますか？たぶんあんまりいらっしゃらないと思うのですけれど。邑南町はすごく猪が、冬になると「罨にかかったぞ」というような声が朝聞こえて、実際に猟師さんもいたりして、そのように食べる食の現場もあるので、たとえば鶏をしめたことがあるとか、そういったような食の生産の裏側も感じられるようなプログラムをできるようになったら、本当の意味での食と農での町づくりになるのではないかなと思って、今ちょっと考えています。

それともうひとつ。二つ目が出張耕すシェフというのをやりたいと思っていて、実際に自分の作った、農家さんが作った作物がどういふふうに変身するのか、今まで見たことのないような変身の仕方を見てみたいという方がけっこういらっしゃるといことが最近わかった



ので、実際にそれを叶えるために自分たちで出ていくつていうようなことも手伝えたらというふうに思っています。そのようなことをやりたいと思っています。

福井 ありがとうございます。一番最初に聞くべきだったのかもしれませんが、「耕すシェフ」って、先程、山崎さんもね、「ネーミング」の話に携わってらしたのだけれど。私もラジオ番組で二回ほど「耕すシェフ」を取り上げさせていただいたら、パーソナリティの女性が、非常に良いネーミングだと驚いていましたけれど。これはどなたが？

安達 これはですね、寺本さんが。役場の商工観光課の方が。

福井 非常に、パッとイメージが湧くネーミングで、素晴らしいと思います。ありがとうございます。

前半と同じように三人の方のコメントをお聴きいただいて、また飯盛先生自身の思いでも結構ですし、これからどうやっていくのか、こういうことやりたいというのがありましたらお願いします。

飯盛 やはりお三方の話をうかがって、すごく将来性が明るいという気がいたしております。やはり、これから山崎さんがおっしゃったように、ある意味地方が先頭ランナーであるところがたくさんあるわけで、そういうなかでイノベーション、新しいこと、新しい価値を生み出すことが、この地方の中から起こってきて、これがいろんな全国に広がっていくというモデルを創造していく必要があると思っております、それがこのお三方のお話からその可能性が見出せるなという気がいたしております。

私個人のことで申し上げますと、今大学に勤務しております。大学は教育研究の拠点ですが、私どものキャンパスは問題発見解決型の研究教育を行うということで、実践を重視しております。プロジェクトベースドラーニングといいまして、単なる教室で勉強するだけではなくて、思い切り外に出かけて行って、フィールドワークをやったりとか、ある時は自分で何かをやって、学生のなかには会社をやったりとかNPOをやったりしている学生も、たくさんおります。そういう実践を通じて、私たちは実践知と呼んでいますけれども、それを育むことによって、社会のお役に立つように頑張ろうというのが、私どもキャンパスのモットーでございます。

さっきお話をさせていただきましたように、地域の活性化のためには、いろんな考えの方がいて、いろんな方々の協働、コラボレーションを引き出して、いろんな人たちのつながりをつくっていくことがまず第一で、これは地域活性化に関心がある人たちだけで集まってやるのは、やはりインパクトに欠けると思うのです。これは重要なことです。もちろん、地域活性化に関心のある方々はコアになります。絶対に欠かせない重要なものです。だけど、そこからさらに地域活性化そのものに興味はないけれども、その活動に自分の思い思いで参加したら実は結果として地域活性化につながっていったというような、場づくりをできるような人つてものを育成していかないといけないと思っております、これを私はプラットフォームをつくる人という意味で、プラットフォームアーキテクトというふうに呼んでいます。基調講演でも申し上げたとおりです。

これは、実はすごく難しいマネジメント能力を要求されます。通常、企業の経営学ですと、ビジョンを明示して、戦力を打ち立てて、ちゃんと資源配分がうまくいくような制度を設計するという流れがありますけど、こういう地域づくりの場合は、一つは成果がすごく見えにくい。成果が出るまですごく時間がかかる。あと命令とか強制がそう簡単ではない。命令して動くようなものでもない。こういうなかで成果をあげていくというのはかなり難しいマネジメント能力を必要とされると思っております。

私は以前、地域づくりの達人の方々のあるシンポジウムの司会を仰せつかったことがあって、その時に地域づくりの有名なリーダーの方々に、「皆さんの成功のポイントはなんですか。」とうかがったことがあります。そのとき、みんな同じことを言ったのです。それは「命

命しないことです。」とおっしゃったのです。「命令しなかったら何もおこらないじゃないですか。」と言ったら、「でも命令してしまうと、地域のいろんな人たちとか仲間たちの主体性を奪うことになる。」と。やはり域学連携でも同じことですが、あくまで地域の方々が主体ですよ。学生たちはサポートという位置づけを私たちは貫いているつもりです。

そういう何も命令はしないけれども、地域が元気になるような何かの方向性にむけていけるような人を育成するにはどうすればいいか。実は、総務省の人材力活性化研究会で活発に議論をしていますけれど、まだまだ、これからもっともっと勉強したり、研究をしていく必要があります。そのためには全国のいろんな事例を集めて、また、もしくは実践（実験）をしながら、それを研究にしていくことが求められます。実は研究をするときに実践を含めるとするのは、社会科学では非常に難しいのです。しかし最近になって、アクションリサーチというやり方で、社会的な実験をしながらそれを研究としてまとめていくという手法も生まれております。このような手法を駆使しながら、この外部の人の関与がどうあるべきかとか、明らかにすべきことがたくさんあります。

私は短期中期的には、たとえば域学連携のノウハウとか、どうすれば効果がでるかとか、もしくは本当に地域間で連携するといろんな面白いことが起こるということも、うちの研究会のメンバーとか、明日の分科会で話をさせていただく西田の研究などでも起こっています。こういう地域の人たちが元気になるような、メカニズムを研究者として実践をしながらきちんと明らかにして、それが地域の方々になるほどこれだよと言っていたところまで分かりやすくお伝えできるようにする、そのような研究したり実践したりする組織、体制をしっかりと構築したいと思っています。

地域が元気になるための具体策を議論して明らかにした上で発信していくための何らかの組織をつくって、そういう実践知、地域のみなさんが手をたたいて喜んでくださるような知識を創造して、発信していく。教育のカリキュラムもあると思いますし、地域の皆様と一緒に勉強していくやり方、ワークショップのやり方とかもあると思います。いろんな方法があると思いますが、それをきちんと実践を通じて、これは役に立ったよ、それはなぜだよという成果なども明らかにしながら、地域の皆様に還元する。これが私の短期中期の目標でございます。以上です。



福井 はい、ありがとうございました。

本当に楽しみなビジョンだと思いますけれども、昨年のパネルディスカッションでも、やはり生活インフラ、最低限のものは必要ですけどもね、やはり最初も最後まで人間だよ、という話になりました。そういう人を育てていくというのは大事ですし、命令しないこと、というのも非常にこう大切な、私もいろいろ関わっていてキーワードだと思います。本当に人材育成、プラットフォームアーキテクト、非常に期待していきたいと思えます。

一番最初に、私、ちょっと例え話みたいに言いましたがけれどもね、やはり、ここの舞台上で、実際に地域の人、いわゆる女優さん男優さんを演じてくださる方が笑顔で、この舞台上に立って良かったなと思っていただけるようじゃなくては、見ている方も楽しくない、良い舞台ができませんのでね、そういうことなのだろうなと聞かせていただきました。ありがとうございます。

山崎さんも同じような観点でいかがでしょうか。

山崎 そうですね、実践型の研究というのは、やはり飯盛先生がおっしゃるように、今まではそれを研究として位置付けるのが難しかったのです。まさにそこを理論化してくれた社会学者だったかな、クルト・レヴィンという人が、アクションリサーチという方法をかなり広めてくれたおかげで、実践の中から出てくるその知識をどういうふうに体系化していくかということが、今では確立された方法になりつつあるということですから、これからたぶん研究の領域から、本当に地域に役に立つようなナレッジが、たくさん出てくる時代がくるだろうと思います。

だから、これは僕の話ですけど、研究の論文集を読んでもあんまり役に立たないということが多かったの

ですね。何か分かっているでしょと、それは確認したのですか、これは、というのが多かったのですが、これからはそうではないタイプの知が、研究の領域から地域に還元される時代がくるだろうなという気がしますので、その意味では研究論文、あるいは大学の研究者の方々が発信される情報というのは、これまで以上に注目すべき内容になっていくだろうと思います。

一方で、実践をすることでコミュニティの結束力を高めるといふ方法もありますね。研究者だけではなく、地域の方々も実践の中から、その組織力を高めたりとか、ナレッジを新しく手に入れたりとかということもあります。今までと同じことをやっていくというのではないタイプの、ちょっとみんなが頑張らないと到達できないような実践を適切な時期にどのように場を提供していくかということも大切になると思いますね。一番最初からいきなりハードルの高いことをやらされてしまうと、もう諦めてしまいますし、先程、安達さんがおっしゃったみたいに一回成功したからといってそれをずっとやっているとマンネリ化しちゃうということになりますから、適度な時に、新しい段階に入って行って、ちょっとこれは本気にならなければという、背筋を伸ばすような実践が、ある一定の間隔で存在することっていうのもすごく大切になってくるのではないかなという気がします。

だから我々が地域に入ってコミュニティデザインみたいなことをやる時は、それをどんなタイミングで出していくのかというのがすごく難しいところでもあり、たぶんやっていて楽しいところでもあると思います。その時にお話にあったような命令するのではなくて、本人たちの中から出ることで新しい実践がうまれるという状態をどのように作っていくか。これは飯盛先生のお話でいうとプラットホームをどのように設定していくかということだと思いますけれども、ここにはいくつかのコツが必要になるだろうなと思います。

常々意識しているのは、否定をしないことですね。住民の人たちが自分たちの生活からこう思ったことというのは、それはまさしく正しいです。だから、みんな意見が違っていても全部正しいと。だから、どれ一人として、外部から入ってきた人は、いやそれは違うでしょうみたいなことを言う必要は全然ないと思ってますね。

ところが、みんな違う意見なので、全員のことを否定しないと一つにまとまらないという状態になっていくのですけれども、この否定せずに話を聞きながら、しかし方向性をいくつかにまとめていくという喋り方っていう

のは、ある程度、訓練でできるようになってくると思います。これは広い意味でファシリテーションという技術だと思いますね。基本的なところにイエスアンドっていう対話の仕方を心がけるようにしています。否定をせずに、ですね、「いいですね、じゃもっとこうしましょうよ。」というように、提案型でどンドン話を進めていく。そこに集まってきている人たちは自分たちの地域を悪くしようと思って来ている人はいないということが大前提だということですから、ちょっとずつ違うニュアンスだったり、否定的なことを言っている、全部受け入れて、「じゃあもうちょっとこういうことでやっていったら面白くなりますね。」と提案型で話を進めていくっていうことをよくやりますね。

僕はデザインをやっていて、建築物を作るといふことの設計をやっていましたけれども、2005年くらいですね、山の中に大きな美術館を作りました、とかですね、ハコモノといわれるものを設計しているのがだんだん嫌になってきて、ランニングコストもかかるし、穂積市長がおっしゃったみたいにインフラとして作ったものをこれからどう維持管理していくかの方が大事な時代だというようなことになっている時に、設計者は依頼があればやっぱり新しいものを設計しなければ食っていけないということで、図面を描かなきゃいけない。これが嫌だから飛び出して、ソフトをデザインするというような話をしているのですね。

ところが、やはり地域に入ってワークショップをやる、第1回目「ハコモノを作ったらええやん。」という意見を言う人がいるのですね。「この地域が元気になるためにどうしたらいいですかねえ、皆さん、ざっくばらんにアイデアを出しましょう。」と言ったら、「そんなもん簡単やん、山の中に美術館を作ってくれたらええやん。」っていうような話がある場合があります。「いや、今美術館を作ったらね、ランニングコストが。」とか、いろいろ言いたくなる気持ちを抑えて、僕らは基本的には「良いっすねえ、美術館。」というところからスタートしなければいけないですね、話としては。「美術館つくったらどんな人がここにきてくれますかねえ。」という、「そりゃ美術館なんやから、デザインとか芸術、アートみたいなものに興味ある人がいっぱい来てくれるやんか、それでええやんか。」「いいですね、デザインとかアートとか興味ある人。そういう人たちにこの町に来てほしいですね。ほかにこの町に来てほしい人、どんな人がいますか？」という、「そら、山とか自然いっぱい

いあるんやから、自然が好きの人が来てくれるとええわな。」「いいじゃないですか。アート、芸術、それから自然が好きの人、こういう人たちに来てほしい、たとえば、山の中、森の中に芸術作品がぼつぼつと置いてあるような森の美術館みたいなものになっていったら、芸術が好き的人也自然が好き的人也両方来ますよね。」という、「そらそうや、別におれは美術館を建ててほしいわけちゃうんや。」という話になったりしますね。「良いですねえ、じゃもっとこうしましょう。」とずっと話を進めていくと、最初は違うことを言っているかもしれないなと思った人の、一番奥底にある、地域のために何がしたいかと思うような気持ちを引き出してくるまで、話をずっと聞きだしていくと、というようなプロセスがすごく大切になると思います。実際、森の美術館ができれば、きっとそのおっちゃんも、「あれ、おれの意見や、おれのアイデアや、おれの。」といって、たぶん、そこを掃除してくれたりとか、結構、愛着が湧いていったりすると思います。

実践型のコミュニティを作っていこうと思う時に、その対話とか話の引き出し方をどのようにやっていくかということは、実は近代、あんまり教育の分野ではやられてこなかったことなのかもしれないという気がします。飯盛先生がまさにやられているのは、それを実践の場の中でどんな喋り方をしたら地域が動かないのか、そしてどういう喋り方にすれば、聞き出し方にすれば、地域がぐっと動いていくのかということ、体験的に学生たちに教えていることなのだろうと思います。

うちの事務所の若いスタッフたちの教育もまったく一緒に、よくOJTと呼ばれますけれど、やっぱり実践型ですね。現場に入ってみて、そこから学ぶことを我々とフィードバックしながら、もっとこのようなやり方をすれば良かったのじゃないのという反省を何回も繰り返しながら、この種の仕事をやっていくというようなことを続けています。これから地域づくりをやっていこうと思った時に、外部の人たちがどうサポートするのか、内なる価値をどういうふうに顕在化させていくのかという時に、命令したりですね、アイデアをこっちから先に出したりするのではなくて、相手が出してきたようなアイデアの芽をどういうふうにするにするにする引き出してきて、さも本人たちが言ったということにして、言ったからにはやってくださいね、と実践に移っていったら、この実践のプロセスの中に地域の新しいタイプの

コミュニティ、これをひょっとしたらアソシエーションと呼ぶのか、テーマ型コミュニティと呼ぶのか、ちょっと今までの自治会や町内会という地縁型のコミュニティとは違った刺激が地域に生まれることによって、もう一度町内会や自治会が少しじゃあ我々もここをサポートしようかというような再活性化のプロセスに入ることもあるだろうというふうに思います。

そんなことをしながらですね、僕のビジョンというのはそんなに、自分が何をやりたいというのはあんまりないのですけれども、中・長期的にも、このような役割を地域で演じながら、おまえは放火魔だと言われながらも、火を付け続けたいというふうに思っていますね。

福井 いやあ、良いですね、本当に。すばらしいと思います。山崎さんとか飯盛先生という方が、全国に二号、三号と増えていくといいですね。連続になるといいなと思いますけれども。

ちょうど、皆様のご協力でいい時間になってきたのですけれども、これだけ言い忘れましたということがございましたら。市長とか小野室長とかよろしいですか？

過疎対策室の方から、皆さん行政関係の方が多くいますのでご存知だと思いますけれど、外部人材を活用するツールというのがホームページ等をご覧くださいと出ております、先程から出ております「地域おこし協力隊」であるとか、「集落支援隊」であるとか、「復興支援員」であるとか、「外部専門家」、いろいろなツールがホームページの方でご覧いただけますので、ぜひご参考になさってくださいということでした。

今日は、ちょうど時間通り、5時ということで終わらせていただくことができます。

どうもありがとうございました。



